

# 荒木貞夫にみる日中戦争期の博物館像(一)

後々田寿徳

## はじめに

本稿は、荒木貞夫(一八七七一―一九六六)が

一、私塾を経営した父の影響を受け、日本近代の学校制度に対する批判精神を少年期より持っていたこと

二、陸軍参謀本部部員(あるいは露国大使館付武官補佐官)としてヨーロッパ滞在中(一九一三ころ)に、スイスの「ルツェルン国際戦争と平和博物館」を見学し、その教育効果に感嘆したこと

三、昭和初頭に、科学博物館の設立を計画したとしていること

四、第一次近衛改造内閣の政策方針下、文部大臣(一九三八―一九三九)として、科学・工業振興に積極的にならずさわつたこと

を述べ、前稿で指摘した、荒木が日本博物館協会会長就任時(一九四〇)、博物館の重要性を強調した事実の背景について考察するものである。

なお、日本博物館協会会長期の活動などについては、次稿その(二)で述べる。

## 一、少年期の教育観

荒木の祖父、貞英は久留米藩士であり、荒木の父、佐々木貞之助を婿養子としたという。貞之助は東京・神田にあった芳林小学校の教師であつたらしい。

荒木出生後、貞之助は浅草田原町に芳林堂(芳林分校)という学校を開き、その経営にあつた。この芳林堂(芳林分校)は、おそらく近世風の守旧的な私塾であつたと思われる。一時は生徒多数を集め、貞之助のほか数名の教師もい

たという。

荒木は幼少期この学校で学んだが、荒木が十歳のころより学校経営が苦しくなり、明治二五(一八九二)年ころには閉鎖されたらしい<sup>2)</sup>。

明治二〇年代は、日本における近代的な学校制度が整いつつある時期であり、数度にわたる「教育令」の改正などによって、大きく教育制度が変化していた。

とくに明治二三(一八九〇)年に公布された「(第二次)小学校令」の

「第二十五条 各市町村ニ於テ其市町村内ノ学齡児童ヲ就学セシムルニ足ルヘキ尋常小学校ヲ設置ス」

により、いわゆる公立小学校が増加したことが、貞之助の学校経営に打撃を与えたのであろう。また同令の

「第三条 尋常小学校ノ教科目ハ修身読書作文習字算術体操トス

2 土地ノ情況ニ依リ体操ヲ缺クコトヲ得又日本地理日本歴史図画唱歌手工ノ一科目若クハ数科目ヲ加ヘ女兒ノ為ニハ裁縫ヲ加フルコトヲ得」

そして

「第十一条 第三条又ハ第四条ニ依リ小学校ノ教科目ヲ加除スルニハ市町村立小学校ニ就キテハ其市参事会又ハ町村長ニ於テ私立小学校ニ就キテハ其設立者ニ於テ府県知事ノ許可ヲ受クヘシ」

「第十六条 小学校ノ教科用図書ハ文部大臣ノ検定シタルモノニ就キ小学校図書審査委員ニ於テ審査シ府県知事ノ許可ヲ受ケタルモノニ限ルヘシ」

などの、国家による小学校教育の管理強化は、少数教師による私塾的小学校の排除にもつながつたと思われる。

学校経営破綻後、貞之助は神奈川の小学校に勤務するようになったが、荒木家は困窮した。荒木は杉浦重剛の設立した東京英語学校(のちの私立日本中学

校)に進学していたが、このため二年で中退し、内職や小学校の助教など、働  
きながら独学により陸軍士官学校への進学をめざしたという。

中学校時代(明治二十四年)の荒木のメモにつきの記述がある。

「目的

余ノ目的ハ現時通学スル東京英語学校ヲ卒業後或ハ初等一級ニ至レバ直チニ第  
一高等中学校ノ試験ヲ受ケ入学シ次ニ当校ヲ卒業直チニ理科大学ニ入り出精シ  
テ余ノ第一志望ノ博士号ヲ得、居ヲ麹町区下二番町ニ定メ、直チニ外務大臣タ  
ルノ志ナリ。其以前ニ浅草区私立同習小学校ヲ改築シ父母ヲ麹町ニ居ラシメ同  
習学校ノ広サヲ田原町二丁目ノ大半ニ垂々セシメントス—中略—余又農学ヲ修  
メ我国ヲシテ産物ニ富マシメントス。之レ余ノ第二ノ志ナリ。余之レニ先立チ  
米國ニ至リ更ニ転ジテ英仏ニ留学シテ帰ラントス。之レ余ノ第三ノ志ナリ。—  
後略」

少年らしい夢想であるが、中学校時代までの荒木が軍人ではなく、科学者を  
志していたとの伝記を裏付けるものであろう。後に荒木が文相に就任した際、  
「文相に成つてから匆々インターヴューで大将は青年時代エンゼニアに成ろ  
うと志したことがあると語っていた」とされる。

注意したいのは荒木が父貞之助の仕事を引き継ぎ、(私立)学校経営への意  
志を第一に示していることである。この意志は、この後再々荒木の回想に姿を  
変えあらわれてくる。

中学校を含め、荒木の学んだ初等教育は、「四書五経」や『本朝三字経(幕  
末の勤皇思想)』の素読など、私塾的色彩を色濃く残した教育であった。しか  
し私塾的であるがため、「小学校令」など国家の教育統制に縛られない教育方  
針の自由さもそこに存在したのではないか。荒木の、父の私塾や中学校につい  
ての、文相期における回想をみよう。

「吾々の子供の時にはまだ日本の国民教育が十分普及して居なくて、丁度寺子  
屋時代から小学校時代に変化する時で、学校は私塾が多く、私共漸く物心がつ  
いた後になって各区に僅に一つ位でしょうか、公立の小学校が出来た。で私の  
父は教育に従事して居つたので私塾を開いて居つた。そこで子供の時から多数  
の塾生に交り、新旧の代り目に於ける教育の変化を子供ながら多少頭に感じて

居たのです。—中略—それから爾後色々境遇の変化から、一七八歳頃に自分で  
教育に関する一つの理想を描いたことがある。それは私塾と学校制度との変革  
期に於ける自分の不満、又私塾を持つて居つた時に、逐次官公立に変わつて行  
く間に於ける私塾に対する圧力というようものが、自分に大きな刺激を与え  
た。それで今も残つて居りますがね。一七八歳頃に学校教育に関する自分の持  
て居る、又自分の知て居る範囲内に於ける制度及方針というようなものを書い  
た。それは教育の普及、天才の愛護、学資による教育の偏頗に対する是正而し  
て最も大なるものは「日本人教育」ということでした。—中略—それから学校  
は、当時まだ中学校が整頓されて居ない時代でしたので、杉浦さんが校長をやつ  
て居られた東京英語学校に学びましたが、是は後に日本中学に変わりました。日  
本中学に変わつてからは新しい制度になつたので多少気分が変わつた。言わゞ国士  
教育より智的教育へとでも申しますか、前の東京英語学校時代に於ては学校自  
体も、生徒自体も自ら非常に誇を感じて居つたですな。それが校風の衰えと共  
に移り変わり行つた様に思われます」

「前の話の連鎖からして私は文部大臣としてよりも是は個人として話さなけれ  
ばならぬと思いますし、又文部大臣としては軽々に述べられないと思いますか  
ら、其点は其お積りでお聴き願いたい。今日の時代の要求のみならず、明治の  
日本の転換期に應ずる教育制度の整頓に付ても痛切に感じたことは、個人の天  
賦を十分伸ばし得ざる教育に変換しつゝあつたこと、それから画一教育の弊と  
いうようなことです。前に言つた私が一七八歳の時に考えたことも、問題の要  
点は此処にあつたのです。是は国としても、寧ろ人生の上から見ても甚だ不合  
理のことではなからうか……」

ここには、おそらく荒木家の没落と重ね合わされた、当時の学校教育統制へ  
の批判が看取される。このような荒木の少年期の教育観は、後述する文相時代  
の教育政策に、少なからぬ影響を与えていると思われる。

## 二：博物館との出会い

荒木は日露戦争従軍後、陸軍参謀本部員あるいは露国大使館付武官補佐官としてロシアに駐在したという。その時期について荒木の諸伝記や年譜は錯綜しており、正確に求めがたい。明治四三（一九一〇）年初頭に陸軍参謀本部員として渡欧し、明治四五（一九一二）年六月に露国大使館付武官補佐官に補され、大正二（一九一三）年七月まで駐在したとある一方、明治四五（一九一二）年五月に帰国命令を受け同年帰国、あるいは明治四四（一九一一）年に帰国との記述もある。

伝記に「ロシア駐在三年」とあり、また駐在中のヨーロッパ旅行について

「第一回は明治四十四年秋から約一ヶ月に亘り南露の旅行、次いで第二回は明治四十五年春から約一ヶ月が中央アジア地方、そして更に第三回は大正二年春から二ヶ月間の欧州の旅行と前後三回に亘ってロシア国内外の旅行を行い、具に海外の情勢を研究し、戦略戦術の見地から欧州各国の古戦場をも訪ねたのであった」<sup>7</sup>

と具体的に述べられているので、荒木の駐在期間は明治四三（一九一〇）〜大正二（一九一三）年であったと思われる。

前稿でも述べたとおり、荒木はこの駐在期間中にスイス・ベルンの平和博物館を見学したという。伝記と回想には

「ベルンでは平和博物館を見学するため一歩足を中心に踏み入れると、驚ろいたことに平和とは凡そ反対のむしろ戦争博物館であった。

だが、戦争が如何に無意味であり、そして又浪費であるかと云うことをあらゆる資料や図表で示し一見して子供にも判る様に巧に陳列され、凡そ古来の戦争の原因から損害結果に到るまで詳細に示されているのは流石と感心した。

將軍は常に単なる机上のものより実物教育を重視し、暗記よりもその応用を尊重し、このため博物館論者であることも有名であるが、恐らくはこの時ベルンの博物館を見学したこともその原因の一部となつたのではなからうか……」<sup>8</sup>

「私は曾て瑞西のベルン平和博物館を視察した。平和のためには戦争の原因と惨禍を知悉するの要があるとし、過去の各種大戦特に奈翁第一世戦及一九七〇

「ママ」年の独仏戦争の資料を豊富に展示し、その要図は相当の尺度で統計と共に見易き図表としてあった。私が曾て陸軍大学で戦史研究に従事した時、此の図表あらば幾許か時間の節約と又印象を深くすることが出来たかと思つた。又実務を取るに当つても必要あらば好む時に博物館を訪ねれば万事足りると思つた。更に学習の時許りでなく、社会へ出ても絶えず研究の便を得るのみか幾度か繰り返し閲覧する間に図表に慣れて記憶も深刻となり、且つ一事の探索にも時間の節約ができると痛切に感じて羨ましくなつた。そして此資料が平和戦争のみならず、其の調査する角度によりて多角的研究の資料となることを知得した。之を拡充して一切の教育特に智識の修得には博物館の整備運用が必要であることを痛切に感得した」<sup>9</sup>

とその見学記があり、荒木が、この博物館の教育効果について感嘆した様子があるが、

当時スイスはもちろん世界的にみても、荒木を驚かせたような本格的な平和博物館はきわめて少ない。荒木のいうベルンの平和博物館とは、「ルツェルン国際戦争と平和博物館」であったと考えられる。<sup>10</sup>

「ルツェルン国際戦争と平和博物館」は、ロシア系ポーランド人で、鉄道・金融事業家、平和運動家であつたジャン・デ・ブロツホ (Jan de Bloch : 1836—1903) の遺志によつて、スイス・ルツェルン市中心街に一九〇二年設立された博物館である。

ピーター・ヴァン・デン・ダンガンによれば、ブロツホは八年間の調査の下、大著『将来の戦争（一八九八）』において、過去の戦争を徹底的に研究した。社会科学的手法により彼は、「その分析と結論を正当かつ説得的なものにするために大変な努力をしたということ——中略——実に多くの統計表やグラフ、図、絵を用い、それらを通して、各種新兵器の命中精度や殺傷能力の実験結果を紹介した。そうすることによつて、自らの主張が厳然たる事実と数字にもとづくものであることを論証」し、軍人が「将来起こるかもしれない大戦争に対してもなお、その遂行と帰結に甚大な影響を与える経済的要因にいささかも留意」しておらず、大国間の戦争は必然的に相互の経済的、社会的、政治的破壊を導くとして「戦争の不可能性」を唱えた。<sup>11</sup>

ブロッホはこうした思想・理論のもと、講演活動や、パリ万博（一九〇〇）において「特別戦争展」の開催を試み、さらに博物館の設立を構想した。

「耳に語り掛けるよりも、目に訴える方がより効果的である」という信念と自分の理論や研究成果を可能な限り図解したいというブロッホの強い願いは、すでに彼の著作に現れていた。彼の著作を読む者は、そこに織り込まれている図・表の場所にくると、自動的にそれらに目を奪われ、数頁の説明文を読むよりも、より鮮明な、そして直接的・永続的な印象を与えられたのである。ハーグ講演時のスライドの使用やパリ万博時の図表の使用は、この著作における試みの第二弾であった。ブロッホの博物館建設構想は、まさしくこの延長線上にあったのである<sup>12</sup>という。

ブロッホは当時スイス軍人と交流があったため、博物館の建設地に有名な観光地ルツェルンを選び準備を進めた。ブロッホは一九〇二年一月に他界するが、同年六月七日、「ルツェルン国際戦争と平和博物館」は開館したのである。

「展示会場は、まるで巨大な物置のように広く、いくつもの領域別コーナーに仕切られていた。——中略——入ってすぐの広いスペースには、古今のあらゆる兵器の実物が展示されていた。そこには、それぞれの兵器の飛距離、命中精度、殺傷能力などが示され、その比較が図示され、そこから出てくる結論も書かれていた。このスペースの次のコーナーは、戦略・戦術が展示されていて、それらはギリシャ・ローマ時代から、最近のボーア戦争のものを含んでいた。このコーナーの特徴は、有名な戦闘場面を大きなレリーフで展示するということであった。——中略——その陸軍大部隊の構成コーナーの壁には、色塗りの図・表が貼ってあって、そこには、当時のヨーロッパの大国の昔と今の軍事支出や戦費が示されていた<sup>13</sup>」

このような「ルツェルン国際戦争と平和博物館」の基本コンセプトや展示品についての記述は、先の荒木の見学記と一致する。ベルンとあるのは荒木の記憶違いと思われる。ベルンとルツェルンは直線距離で四〇マイル弱、スイスの主要都市としては隣町といえる。

ただし、先述したように荒木がスイスを訪れたのは「大正二年春から二ヶ月

間の欧州の旅」であったと思われるため、見学したのはこの一九〇二年開館の当初の博物館ではなく、一九一〇年七月に同市内に移転した「第二博物館」であろう。この新博物館も、当初の展示品の多数を引き継ぎ、「各種兵器（実物）」「三十年戦争・七年戦争・ナポレオン戦争」「普仏戦争」など十一のコーナーが展示されていた<sup>14</sup>というので、荒木の見学記と符合する。

「ルツェルン国際戦争と平和博物館」は、単に平和（戦争）博物館としてのみではなく、科学系博物館としても、四千四百点もの資料を擁し、優れたジオラマ・コーナーなど、「完璧で、興味深く、多様である<sup>15</sup>」、「かくも科学的、客観的な展示<sup>16</sup>」と絶賛された当時最先端の博物館であったと考えられる。

当時日本でこうした科学系博物館に類するものとしては、東京高等師範学校附属教育博物館より独立した東京教育博物館くらいしかなかった。荒木が、そのテーマもさることながら、本格的な博物館による展示効果、教育効果に感嘆したことは容易にうなずける。

この「ルツェルン国際戦争と平和博物館」の体験が、荒木の近代的な科学系博物館との出会いであったと思われる。帰国の翌年、荒木は陸軍大学校教官をつとめているが、先の回想にあるとおりその教育の現場でも、この博物館の教育効果を憧憬の念を持って回顧したのであることは、想像に難くない。

### 三、科学博物館設立計画

荒木の回想・伝記には、昭和初頭に（科学）博物館の設立を計画したという記述が散見される。

「急がば廻れの諺の如く国家興隆の基礎は迂遠に似て第一が教育にあることは既に周知のことです。同様に教育も亦社会的な大衆教育機関の設備が遠道の様でこれが最も近道であることを知らねばなりません。

私共は同憂の士と共に昭和の初より此点に微力を致し博物館特に科学大殿堂の建設を叫び来つたのでありますが、早くも十五年は空しく過ぎ唯不急の事業なりとせられて一日一日を空しく経過し今日此事態に直面致しましたことは返す

返すも遺憾に思うのであります<sup>17</sup>」

「後年博物館協会会長に就任し、今の後楽園球場の場所（元砲兵工廂跡）に大博物館と図書館設立を計画して、有賀、池田（成）等の財界巨頭を説き、三井、三菱は各五千万円の寄付を約し諒解したので、当時、更に將軍は高橋是清氏とも折衝した結果彼の賛意を得て政府も之に対し、三井、三菱の寄付決定を条件として後楽園の無償下げを内諾し、（大蔵省の査定は当時確か五千万円）その実現に今一步のところまで来ながらも予期せぬ政界の混乱に災されついに実現を見なかつたものゝ場所と云い内容と云い將軍一流の雄大な構想は、万一これが実現していたら世界一流の博物館として、広く世界文化にも貢献するところ蓋し広大なものがあつたらう。將軍も當時を回想して、

「もう一步のところ迄進んでいたのだから惜しい事をしてしまった」と如何にも残念そうに洩らしていた<sup>18</sup>」

「私は、博物館によつて社会教育をやり、国民の中に科学思想の根を張らそうと考へた。そこで私は、今の後楽園のところに二億円の予算で、大博物館を作らうと計画した。この土地は陸軍省の管理から大蔵省に移つていた。私は犬養内閣から齋藤内閣へ移るころ、当時の財界の大立者、郷誠之助と池田成彬の両氏に話し、五千万円の拠金を依頼した。二人はこれを引受けてくれ、一方高橋蔵相に話し政府も五千万円出すことに話しはまとまつていた。が、政変でそのままになつてしまった。

この話を第一次近衛内閣の参議のとき、むし返して、ふたたび郷、池田の両氏に話し、大蔵省も乗気になつていたが、遂にその実現を見ないうちに事変段階にはいつてしまつた<sup>19</sup>」

「昭和八、九年の頃、科学振興のため、総合大科学博物館建設の必要を痛感し、当時陸軍造兵廂の跡、即ち今の後楽園スタヂアムのある二〇数万坪の地が文教地域にも近く交通にも便なる所なので、此地に此博物館を設立し、之れに科学図書館を附属し、当時世界の新製品を陳列し、見本市の中心となし、又其学習に疲れたるものの休憩所として、後楽園を利用することを立案し、時の蔵相高橋是清、財界の池田成彬、郷誠之助等とも相談し、政府は先ず当時々価五、〇〇〇万円の此土地を提供し、三井、三菱両財団より各五、〇〇〇万円又一般よ

り五、〇〇〇万円を集め、計二億円を之れに充つることとし、既に政府及両財界の同意を得、其具体的設計を為さんと地質の調査をも為し、其基礎工事は相当困難あるを以て之れを如何に克服するかまで進んだが、私は未だ博物館協会に關係なく、また、其残務も転々して居る間に遂に今日の後楽園スタヂアム等々となりて此計画も中途にして消えたが、後棚橋翁とも相談し、別に代地を求めて之れが実現を計画したこともあつた<sup>20</sup>」

これらを整理すると、昭和初頭、おそらく荒木の陸軍大臣期（昭和六、九年）ころに、政府・財界の協力を得て、現在の後楽園の地に本格的な（科学）博物館建設を計画したものと考えられる。後楽園スタヂアムが昭和十二（一九三七）年に完成していること、日本博物館協会会長期にこれについて言及していることからみて、会長期（昭和十五年以降）に計画されていた「大東亜博物館」などと混同しているとは考えられない。

しかし、この計画についての関連史料は、荒木の回想・伝記以外にまつたくみることができない。計画の有無について、現時点では不明としたい。

#### 四―一．文相就任前夜

荒木の文相期の政策について検討する前に、当時の荒木をめぐる政治状況や、文相就任直前の内閣参議期などについて簡単に述べる。

荒木は陸相辞任後、軍事参議官として陸軍中枢に留まつていたが、二・二六事件の際、青年将校らに同情的立場を取つたこと、またその後のいわゆる「皇道派」に対する肅正人事によつて、昭和十一（一九三六）年三月、軍事参議官を辞し予備役となつた。これにより荒木の陸軍中枢への直接的関与、すなわち軍閥的勢力は失われたとみてよい。

荒木が政治の舞台に復帰したきっかけは、昭和十二（一九三七）年六月の第一次近衛内閣成立と、同年七月の盧溝橋事件を発端とする日中戦争の勃発である。

近衛文磨は、荒木ら「皇道派」軍人に好意を持つていたとされる<sup>22</sup>。台頭する

陸軍を押しえ日中戦争の早期終結などのため、同年十月、宇垣一成、荒木の二名を陸軍から、池田成彬、郷誠之助を財界からなど、計十名を内閣参議として迎えている。

松浦正孝によれば、この近衛の内閣参議制は、以下の三点を目的としたという。

一、各界各派閥を代表すると考えられる人物を均衡させて集めることにより、内閣の支持勢力が「挙国一致」的であり体制が強固であることを内外に示すこと

二、日中戦争遂行のため財政経済面での内閣の強化

三、日中戦争收拾工作の準備

このうち、当初の主目的は一であったが、後に三へと移行したとする<sup>23</sup>。日中戦争收拾工作にはおもに宇垣と池田があつたというが、荒木も助力したと考えられる。荒木の伝記に当時近衛と日中戦争收拾について論じ、「近衛はかねて將軍の人格と経綸に深く傾倒していた事とて、何とかして將軍の出馬を求めんとし―中略―新に官制を設けて参議制を作り、將軍を正式に相談役として迎えることに成功した<sup>24</sup>」とあり、荒木の参議就任は、宇垣らと同じく「日中戦争收拾の局に当たらせ、軍部および国民の講和に対する不満を抑えさせようという<sup>25</sup>こと」にあつたとみてよい。

また昭和十年前後の荒木は、現役を退いたとはいえ、軍部、国民一般にも広く大衆的な人気があつたと思われる。宣野座菜央見によれば陸相期の荒木は「政治的パフォーマンスが冴えなかつたのに引きかえ、社会的・文化的アリーナでのそれは、きわめて重要な意味をもつ。『皇軍』『皇道精神』を宣伝するPRマンとしては成功したからだ。―中略―彼は精力的に公衆の場で数多くの演説をこなし、多数のパンフレットを刊行し、全国・地方の新聞、『キング』のような大衆雑紙の紙上にも写真入りで頻繁に登場した。ラジオは一般向けから子供番組にまで現れ、―中略―おおかたの公人・識者とは違って、浅草育ちで明朗能弁な精神主義者・荒木はメディア受けしたようだ<sup>26</sup>」

という。国民の内閣支持強化のための「看板」的な機能も、荒木に求められたと思われる。

しかしながら日中戦争は次第に拡大し、昭和十三（一九三八）年五月には国家総動員法などが成立し、計画経済体制に突入する。日本経済は極度の危機にあつた。そのため同月近衛は、日中戦争收拾政策で対立していた杉山元陸相を更迭し、内閣改造をおこなった。

#### 四―二、文相就任の経緯

昭和十三（一九三八）年五月二八日、荒木は第一次近衛改造内閣の文部大臣に就任した。外相の宇垣、蔵相兼商工相の池田とともに内閣参議からの就任であり、陸相は板垣征四郎であつた。これは先述した日中戦争の早期收拾と、財政経済の安定を急務としたものであり、荒木をはじめ「皇道派」にとつては、表舞台への復活でもあつた。

「こうした人事を、皇道派も支持していた。近衛は皇道派の復活に熱心であり、―中略―近衛は皇道派の荒木貞夫と宇垣との関係がよくなったことを原田に語っており、宇垣と皇道派との間の融和や皇道派の支持のうえに、近衛は改造を推進した<sup>27</sup>」とされる。

就任にあたり近衛は荒木に「貴方を文相の椅子にお迎えするのは一応役不足の感があるのですが、この際は是非御諒承の上、大局から兎も角是非御引受け願いたいのです。参議では貴方も御承知の如く真剣には何も出来ないし、折角の経綸も実行出来ず、意味がないのでこの際何でも一応閣僚の椅子に就いて頂いて危局に直面せる邦家のため働いて頂きたいのです<sup>28</sup>」

「今更文相でもないのですから、文相の仕事はどうでも良ろしいのです。どうか国務大臣として専ら事変の解決処理に御協力頂きたい<sup>29</sup>」などと述べたという。

このように荒木の文相就任は、当初あくまで日中戦争早期收拾が目的であつたことが知れる。

当時の政治評論家・野村重太郎は文相就任の経緯について

「近衛が荒木を入閣させたのは、参議の場合と同様、宇垣との均衡が主たるものであるが、文教の大臣としては、荒木の日本人らしい倫理観とそれにもとづく或る程度の感化力を買ったのかも知れない」

とし、荒木の文教制度改正などに期待しながらも

「近衛としては、そこまで立ち入った事務大臣の役割を荒木に期待してはいないであろう。事変下の青年子弟の気風を或る程度、一新し得れば、それだけでも大きな収穫であり、本筋はやはり、陸軍出身の事務大臣として事変処理の途に協力することに在ると思う<sup>30</sup>」

しかし、現実の近衛内閣は「戦争收拾方針を内閣中枢部によって強力に統合・推進するために、新しい政治運営方式を採用した。五相会議方式である<sup>31</sup>」。すなわち首相・陸相・海相・外相・蔵相による首脳会議であり、荒木は除外された。荒木は内政担当の四相会議（首相・内相・蔵相・文相）に参加したのである。

荒木はひさしぶりの国政参画に意欲を持ったのであろうか、九月には自ら日中戦争処理に関する国策案をまとめ、四相会議に提出したらしいが、回を重ねても他の閣僚らはまったくこれに関心を示さず、実際には「当時は当面の肝心な国策は他の五相会議で進められて居たのであって、文相たる将軍は之れには少しも与っていない<sup>32</sup>」のであり、近衛の対応も消極的であったという。

よって荒木の近衛改造内閣入閣は、政治手腕を認められたからではなく、荒木にその大衆的人気により「軍部および国民の講和に対する不満を抑えさせよう」とすること、また国家総動員・統制経済体制下の逼迫した国民生活に、陸相期からの「非常時」「皇道精神」などの「精神主義」イデオログとして、大義名分を与えさせることが、結果として目的ではなかったかと思われる。

結局この改造内閣も、陸軍の戦争拡大を押さええることはできず、同年九月の宇垣外相の辞任によって崩壊をはじめた。同年十月、武漢三鎮攻略により、日中戦争は完全に長期戦・泥沼化していく。第一次近衛内閣は翌昭和十四年（一九三九）年一月十五日、総辞職した。荒木は後継である平沼騏一郎内閣にも文相として留任し、同年八月二八日同日内閣解散によって辞任している。

#### 四―三、文教政策

前述した経緯にもかかわらず、荒木はこの一年三ヶ月足らずの文相期にさまざまな政策をおこなっている。

概観すれば荒木は、近衛内閣前期は日中戦争処理に積極的に関与していたが、次第にその関与を薄めもしくは放棄し、昭和十三年末ころには文教政策に集中しはじめた。そして平沼内閣期に数多くの政策を実施している。

近衛内閣の、おそらく末期に「近衛から

「文部省の仕事は適当にやって、国務大臣としての仕事にもっと専念して頂きたい」

と幾分不満らしい希望があり、また将軍の知友からも

「貴方は一体何をされているのです。支那事変の終息に命をかけて下さい」

と懇請された事もあった。然し、其の位置と環境と更には肝心の近衛の最初の意気込がやがて冷めた為に却て将軍は苦境に陥って、充分に腕を振うことが出来ず、後年も之れこそ一生の心残りであった<sup>33</sup>」

としていること、また近衛内閣解散そして平沼内閣への留任時の荒木が

「近衛内閣の閣僚を最後に、当時全く時局の推移に認識を欠く政界に愛想をつかし、別途救国の方策を胸に抱き引退を決心したが、後継内閣主班の平沼が強つてそのまゝ文相としての留任を懇請し、他方彼には曾って国本社当時から義理もあって、このため将軍も留任を受諾したが、今度は近衛内閣の時と異なり入閣の目的がはつきりしなかった。従つて自然対外国策には関係なく、時局の主流には一切関係せず、この間に専ら文相として、近衛内閣当時から懸案の解決を使命とした<sup>34</sup>」

という心境であったことが、この経過を裏付けよう。

荒木の文相期の政策のうち、おもだったものを時期順に述べる<sup>35</sup>。荒木が予算編成に関与したのは、昭和十四年度のみであることを注意したい。

一、「帝国大学改革（十三・七〜十四・春）」

帝大の学長人選を教授会選挙による公選ではなく、文部大臣の任命とした。東京帝大経済学部の人選にも関与。

二、「科学振興調査会の設置（十三・八）」

企画院の科学審議会に対抗して設置か。自ら会長に就任。第一号諮問は十三・十一であり、第一回答中は十四・二。

三、「全帝国大学に理・工学系講座増設（十三・十一）（十四・四）」

東京帝大工学部に航空原動機学講座新設。京都帝大に薬品分析化学、薬品製造学、燃料化学各講座新設。九州帝大工学部から地質学を削り数学及力学、物理学、化学各講座新設。同理学部を新設し数学、物理学、化学、地質学各講座新設。東北帝大工学部に航空学講座新設。大阪帝大工学部の応用理学三講座を一講座に、航空学一講座を航空学四講座に、精密工学三講座新設。北海道帝大工学部の燃料学二講座を三講座にする。これらにともない、教官などを増員。

四、「資源科学研究所、人文科学研究所、農学研究所の設置（十四・二）（八）」

東京工業大学に資源科学研究所、京都帝大に人文科学研究所、東北帝大に農学研究所を設置。

五、「昭和十四年度歳入歳出総予算追加など（十四・三）」

学芸研究及奨励費（三、一六〇、〇〇〇円）／学校及図書館支出金（一、三〇一、一七九円）などを追加。昭和十四年度より二十九年までで総額一二五、〇〇〇円の私立大学補助。

六、「名古屋帝国大学設立（十四・三）」

名古屋医科大学を廃して名古屋帝大を新設。

七、「映画法制定（十四・四）」

日本初の文化立法とされる。映画の国家統制、文化映画の普及推進などが目的。

八、「宗教団体法制定（十四・四）」

宗教団体の国家統制。イスラム教や新興宗教排除などが目的。

九、「青年学校教育費国庫負担化（十四・四）」

尋常小学校卒業後、二年の普通科・五（三）年の本科への男子の進学を養

務教育化（国庫負担化）。また兵役についた教員の俸給を国庫負担化。

十、「大学付属医学専門部の設置（十四・五）」

帝国大学、官立医科大学など十三大学に付属医学専門部を設置。

十一、「高等工業学校設立（十四・五）」

室蘭、盛岡、多賀、大阪、宇部、新居浜、久留米の七高等工業学校新設。教員等増員。

十二、「商船学校を官立化（十四・八）」

富山、鳥羽、大島、鹿児島四公立商船学校を官立化。

## 四―四 科学・工業振興政策

一見してわかるように、荒木は高等教育機関を中心に、積極的に科学・工業教育、研究を推進している。

廣重徹は、文相期の荒木について

「文部大臣としての荒木は、教授・総長の人事権を大学からとりあげて政府の任命権とすることを企てた、大学自治への攻撃者として歴史に名をとどめている。それはたしかに、一九三〇年代に軍国主義化が進むなかで皇道派の総帥として名を売った荒木にふさわしい役割であった。しかし、その荒木が同時に科学政策に少なからぬ役割をはたした人物でもあったことは、銘記しておくに値する」<sup>36</sup>

とし、おもに科学振興調査会についてふれ、その成果、すなわち学芸研究及奨励費の大幅な増額（昭和十三年度七三、〇〇〇円の四十倍以上）が今日の文部科学省科学研究費の源であることを指摘した。

昭和十三（一九三八）年夏からの荒木の帝大改革は、単なる大学自治への攻撃、国家統制のみでは語れない。当時、菊地武夫貴族院議員をはじめとする右翼的政治家・軍部による帝大への政治的攻撃があいついでいた。昭和十三年九月に結成された「帝大肅正期成同盟」などが代表的な圧力団体であり、いわゆる左翼的思想や教官の一扫を文部省・帝大に要求していた。

高等教育機関における科学・工業振興を期する荒木にとつて、こうした圧力をまず回避する必要があつた。そのため政治的なポーズとして、大学改革を要求したとも考えられる。結果として

「荒木による従来からの大学人事決定の方式に対する変更要求は、大学そして文部省に大きな圧力となつた。そして、約三ヶ月の交渉の後、形式的には荒木の意向を取り入れ、実質的にはほぼ従来を継承した人事決定方式が決定している<sup>37</sup>」

すなわち

「全帝大の心胆を寒からしめた大学の自治干渉は、大山鳴動してネズミ一匹に終わった。総長公選はそのまま残つた」<sup>38</sup>

からである。当時の『東洋経済新報』には、この荒木や文部省の帝大改革が、中途半端で手ぬるいとの批判が再々ある<sup>39</sup>。

改革後、東京帝大が自主的に選出したとされる平賀讓総長(海軍造船中将)が、議会や軍部への荒木の政治的な援助を得て、同経済学部問題解決(いわゆる平賀肅学)に成功したらしいことをみても、これはおもに東京帝大への政治的圧力の回避あるいは防波堤となり、講座、研究所などの増強、研究費増額などの予算措置を実現するための、荒木の戦略であつたとみてよい。

荒木は続いて同年十一月に、文部省幹部を刷新した。次官に元北海道長官の石黒英彦、専門学務局長に天文学者・東京帝大教授である関口鯉吉を迎えるなど、科学・工業振興政策のための省内体制を強化している。同月、科学振興調査会に第一回諮問「科学振興二関スル具体的方策如何」をおこない、翌昭和十四(一九三九)年三月十一日、第一回答申を得た。

「人材養成ノ問題及研究機関ノ整備拡充並ニ連絡統一ノ問題ニ関スル答申  
現下時局ノ進展ニ伴ヒ国家ノ要望ニ鑑ミ我が国科学ヲソノ根底ヨリ振興セシムル為諸般ノ施設ヲ必要トスルモ、就中緊急ノ方策トシテ

一 科学関係ノ業務ニ従事スベキ技術者並ニ研究員ノ養成ハ科学振興上焦眉ノ急務ナルヲ以テ最近ニ於ケル人的要素ノ需給状態ヲ調査シ速ニ之ガ対策ヲ樹立スル必要ト之ガ実現ノ可能性ヲモ考慮シ

(一) 大学卒業生ヲ差シ当タリ最小限三倍以上ニ増加セシムベシ

(二) 高等学校理科学校ノ定員ヲ増加シ尚学級増加又ハ新設ヲナスベシ

(三) 実業専門学校、実業中等学校ニ関シテハ文部省ノ現計画案ヲ速ニ実現スベシ

二 政府ハ我が国研究機関ノ現状ニ鑑ミ大イニ之ヲ整備拡充シ、進ンデ文部大臣ノ管理ノ下ニ有力ナル科学行政ノ中枢機関ヲ設ケ研究機関ノ連絡統一ヲ図リ、我が国科学研究ノ発達ヲ促進セシムベシ

右中枢機関ニハ権威アル審議機関ヲ置キ科学行政ニ参与セシムベシ

右二項ノ急速ナル実施ヲ要望ス<sup>41</sup>

この答申と新幹部陣などを背景に、荒木は強引ともいえる科学・工業振興予算を獲得したという。

「関口専門学務局長の意見を容れ、研究費を」直ちにこれを予算化せんとしたが、時既に遅く(十四年三月)毎年一千万円の経常費としての計上に事務的にも時間的にも間に合わなかつたが、——中略——直ぐ自ら石渡蔵相を訪ね、これが研究の重要性を強調し、追加予算として経常的に毎年一千万円の支出を要望した。——中略——取り敢えずその年は三百万円の予算とし、翌年度から経常費として出来得る限り一千万円に近い科学振興費を取る事に蔵相の賛成を得て、議會終了直前にこの第一回予算は通過し「た」<sup>42</sup>

文相期の荒木の政策は、基本的に第一次近衛内閣の政治路線の一環であつたと考えたい。先述したとおり、近衛内閣の大きな政治的課題は国内財政経済の安定にあつた。そのため蔵相兼商工相の池田成彬は、国内産業の重化学工業化路線を積極的に推進した。

荒木はその国策に忠実にしたが、科学・工業振興を図つたとみることができ。先述したパフォーマンスとしての帝大改革、航空原動機学講座やおそらく軍医養成のための付属医学専門部の設置などは、右翼的政治家・軍部の要求とのバランスをとつた政治的結果と考えられる。

この時期の荒木は、軍閥からも離れており、四—三でふれたように、国策への政治的な野心もほとんどなかつた。荒木は平沼内閣期において、「皇道派」復権に助力してくれた近衛の政策を、忠節を尽くし実現したともいえるだろう。

- 註
- 1 後々田寿徳 二〇〇五 「研究ノート」荒木貞夫と「国家の興隆と博物館の重要使命」について」東北芸術工科大学紀要 No.17
  - ※なお同稿の二頁・上段「宇垣一成、真崎甚三郎などとともに」を「真崎甚三郎、小畑敏四郎などとともに」へと訂正したい。
  - 2 原田高一 一九二三 『巨星荒木陸相を語る』三友出版社、橋川学 一九五四 『秘録陸軍裏面史・將軍荒木の七十年 上巻』大和書房
  - ※以降、引用文中の旧漢字、旧仮名遣いは改めたところが多い。なお誤字脱字と思われるものは改めていない。
  - 3 橋川学 一九五四 『秘録陸軍裏面史・將軍荒木の七十年 上巻』大和書房 五一頁
  - 4 新明正道 一九三八 「荒木大将文相となる―社会時評」文藝春秋 第十六卷七号 八八頁
  - 5 荒木貞夫／杉山平助 一九三八 「教育の革新を語る」文藝春秋 第十六卷八号 一一〇～一一二頁
  - 6 註2前掲書および橋川学 一九八七 『荒木將軍の実像…その哲と情に学ぶ』泰流社
  - 7 註3前掲書 一八〇頁
  - 8 註3前掲書 二〇六～二〇七頁
  - 9 荒木貞夫 一九六一 「博物館事業と棚橋源太郎翁」博物館研究 三四卷六号 一二頁
  - 10 「Krieg und Frieden im Museum, "Annee-Ausbildungszentrum Luzern, 2002, p.4. ではこの博物館を世界最初の「平和博物館」としている。なおLucern(Lucerne)の日本語読みはスイス政府観光局の表記にしたがった。
  - 11 Peter van den Dungen, "The International Museum of War and Peace at Lucern," Schweizerische Zeitschrift für Geschichte, Vol.31, 1981, pp. 185-202. / 坪井主税「訳」二〇〇〇「翻訳 ルサーン国際戦争と平和博物館(一)」札幌学院大学人文学会紀要 六八号 九三～九五頁
  - 12 註11前掲書 九七頁
  - 13 註11前掲書 九九頁
  - 14 坪井主税 二〇〇〇 「研究ノート ルサーン国際戦争と平和博物館―視覚資料による建物・展示会場および一部展示品の再現―」札幌学院大学人文学会紀要 六七号
  - 15 註11前掲書 一〇〇頁
  - 16 坪井主税「訳」二〇〇一「翻訳 ルサーン国際戦争と平和博物館(二)」札幌学院大学人文学会紀要 六九号 九二頁
  - 17 荒木貞夫 一九四〇「国家の興隆と博物館の重要使命」博物館研究 十三卷十号 二頁
  - 18 註3前掲書 二〇七頁
  - 19 有竹修二「編」一九七五『荒木貞夫風雲三十年』芙蓉書房 二二二頁
  - 20 註9前掲書 三頁
  - 21 金子淳 二〇〇一『博物館の政治学』青弓社 一六一～一八三頁 参照
  - 22 註19前掲書 二五二頁、伊藤隆校訂解説 一九九一「荒木貞夫日記(未公開史料)」文藝春秋 一〇六卷三号 二五三頁
  - 23 松浦正孝 一九九五『日中戦争期における経済と政治 近衛文麿と池田成彬』東京大学出版会 七七～八一頁
  - 24 橋川学 一九五五『嵐と闘ふ哲將荒木』荒木貞夫將軍伝記編纂刊行会 四三四頁
  - 25 註22前掲書 八〇頁
  - 26 宣野座葉央見 二〇〇四「『小春日和の平和』における非常時 映画『非常時日本』のイデオロギー」『日本映画史叢書一 日本映画とナシヨナリズム 一九三一―一九四五』森話社 四三～四四頁
  - 27 註22前掲書 八四頁
  - 28 註23前掲書 四四七頁
  - 29 註23前掲書 四四九頁
  - 30 野村重太郎 一九三八「宇垣と荒木」日本評論 十卷十号 一九四頁
  - 31 註22前掲書 八七頁
  - 32 註23前掲書 四八七頁
  - 33 註23前掲書 四九七頁
  - 34 註23前掲書 四八八～四八九頁
  - 35 おもに国立公文書館所蔵の当該年の勅令、法律による。そのため実際の施行、実施時期とは異なるものがある。
  - 36 廣重徹 二〇〇二(一九七三)『科学の社会史(上)』岩波書店 二〇二頁
  - 37 東京大学史料室「編」一九九八『東京大学の学徒動員・学徒出陣』東京大学出版会 一九五頁
  - 38 加藤地三 一九六五「荒木貞夫と大学の自治」日本 八卷四号 一〇八頁
  - 39 (社論) 一九三八「荒木文相の帝大改革案 果して之は文相の真意であるか」東洋経済新報 八月六日号、(社論) 一九三八「全国一大学制案 敢へて荒木文相の考慮を望む」東洋経済新報 八月二十日号
  - 40 荒木は、同経済学部教授土方成美の免職に関して、東京帝大および文部省への議会や陸軍からの圧力をはねつけたという。註19前掲書 二一三～二一四頁、註23前掲書 四六二～四六五頁
  - 41 日本科学史学会編 一九七〇『日本科学技術史大系…第四卷』第一法規出版 三二九～三三〇頁
  - 42 註23前掲書 四七二頁
- 執筆者  
後々田寿徳 学芸員課程 専任講師  
GOGOYA Hisanori Curator Program/Lecturer

## The ideas of the museum by Sadao Araki during the Second Sino—Japanese War period (1937—45) [Part I]

GOGOTA Hisanori

A Study of the background that Sadao Araki (1877-1966) emphasized importance of the museum when he was the chairman of the Japanese Association of Museums (1940), as followings:

I. He had a sense of incompatibility to the school system of Japanese modern ages since the boyhood, because of the influence received from his father who managed the old - fashioned private school.

II. He was impressed with "The International Museum of War and Peace at Lucerne" during his stay in Europe as Major or officer from The Japanese Embassy in Sankt Petersburg around 1913.

III. He might plan the establishment of a Science Museum in the beginning of the Showa era.

IV. He contributed to the advancement of science during his term of Minister of Education (1938-1939) with the first Kono Cabinet.